

「落語と私」 その貳拾七

三代目 橘ノ百圓

今、この原稿を書いているのが、2月の下旬、皆様もご承知の通り、毎日毎日新型コロナウイルスの報道で、この中国春節の時期で、観光客も激減して、世界経済にも影響が出始めている様で、何ンとなく心が塞ぎます。マアそんな後向きな事を言っても仕方が無いのですが、皆様も十分に気を付けてください。

テな訳で今回は、落語と病気について書き進めます。現在、寄席、勉強会、個人の会で良く演じられる約560の噺の中から、病に関するものを選びますと、23ほどですが、無論これが正しい数ではありません。この23の噺を粗く分けてみますと

眼病 麻のれん、景清、義眼、心眼、犬の目

恋患 幾代餅、紺屋高尾、崇徳院、千両みかん

廓病 おかふい、鼻欲しい

風邪 風邪の神送り

癩(胃痙攣) 夢金、やかん舐め

疝気(ヘルニア) 疝気の虫

気鬱症 擬宝珠、肝つぶし

逆上せ 身体の冷 強情灸

悪性腫瘍 なめる

外に三ッほど病名の判らない噺が在ります。

近頃では、余り演らなくなりましたが「按摩の炬燵」なども在ります。今は電波に乗せる場合は色々と制約が厳しくて、体に障害の在る方の噺は出来なくなりました。「麻のれん」も寄席では聴けますが、又「唾の釣り」廓病の「おかふい」「鼻欲しい」などは、テレビでは・・・

こうして見ると、目の病の演目が多いですネ。私も近頃罹らなくなりましたが“モノモライ”テな病も在ります。街中でも余り眼帯を掛けている人も見なくなりました。私は子供の頃、良くこの“モノモライ”に罹りました。そんな時母が「黄楊の櫛を畳に擦って熱くして患部に当てると治るヨ」と言われ、“モノモライ”の度ンびにそれを実行した者です。本当に治ったのです。又、風邪をひいた時には、鯉節を削り、葱を刻んで醤油で味付けした所に、熱湯を注いで飲むと、熱が下がるテな事もしてました。これは家庭の医学、生活の知恵ですが、腸の具合が悪い時は「正露



飛鳥山公園の桜
出典：北区役所

丸」風邪には「葛根湯」、皆様にも、これはと言う薬が有ると思います。この様に自分に合った治療法、薬などの事を合薬と言いますが、中には変わった合薬が有りまして、癩癩の発作には、頭に草履を乗せるとか、フグの毒に当たった時には、その人を土中に埋める。何んだか怪しいものまで在ります。

ここに、さる^{たいけ}大家のオカミさん、大変な癩もちで、またその合薬が、やかんを舐めると直ぐに治ると言う！ある日の事、下女を連れて花見に出掛けるが途中冬眠から覚めた蛇に遭い癩を起し大変な苦しみ様。困った

のが下女で、合薬のやかんの持参は無し(有る訳ないですよネ)途方に暮れていると、少し離れた所に下男の^{べくない}可内を連れ、2人楽しく談笑しながら、こちらに歩いて来る立派なお侍、この侍の頭を見ると^{のぼせ}逆上症の為か、^{つむり}頭に毛が1本も無い見事な禿げ頭、所謂“やかん頭”(関西では、^{ちやびん}茶瓶と言います。俗に“禿茶瓶”)ここで何を思ったか下女は、その侍に駆け寄って「お願いがございます、お願いがございます」と、その侍が「ウン何用じゃ!?!」「私の主が癩を起しまして、大層苦しんでおります。そこで、お願いがございます」「オウ儂の^{わし}蝮指で、その者の腹の辺りを押せと申すか!?!」「イエそうではございませぬ」「では、禪で固く体を巻き付けると、癩が治ると聞くが、儂の禪を所望か!?!」「違います。主の癩の合薬がやかんでございまして、是非共、貴方様にお願いがございます」「イヤ、儂はやかんは持参しておらぬが」「ハイ、イエそこでお願ひがございます。貴方様の^{つむり}お頭を舐めさせて頂きたいのですが」「何に?・・・無礼者!!拙者の頭を何んと思っておる・・・これ^{べくない}可内、そこで肩を震わせて笑うで無い!そこな女中、そこになおれ!」「ハイ、お手打ちは覚悟の上でございます(中略)」「ウン左様か。可内、笑うナ!しからば、その方の忠心に免じ、少し舐めさせる事としよう。その者は^{いずこ}何処に居る」これから下女が主の元へ、とツこのオカミさん、余程苦しかったとみえ、侍の頭を抱えると、ベロベロベロベロ舐めたの舐めないの。「痛い、痛い、これ左様に手荒に致すナ」と侍が言うくらい、これで癩もケロリと治ったオカミさん「有難うございます。お陰様で癩もスッカリ治りました。お礼がしとう存じますので、お名前を!?!」「馬鹿を申せ!礼などされて堪るか、何んの誉になるものか、道で^で出会うても挨拶などするで無いぞ!」と、この侍と下男は帰って行く。途中、下男が「良い人助けを致しましたナ」「ウン、左様で在るナ、少し頭がヒリヒリ致すが」「アッ!歯の跡がニツ着いております」「そうか、あの女、夢中で^{かじりつ}噛付きおったからナ。デッ、傷の具合は!?!」「イエ、ご心配には及びませぬ。漏るほどではございませぬ」考え落ちですネ。バカバカしいですが、心温まる噺です。やはり、小三治師匠ですかネ。今は亡き、喜多八師も中なかでした。最近では、現文治師のを新宿で聴きました。昔から余り高座に懸る噺では在りませぬ。今は、桜の時期で演りますが、別名を「梅見のやかん」上方では「茶瓶ねぶり」

今回は「落語と病気」と題してバカバカしい噺を載せましたが、この新型コロナウイルスが1日も早く終息する事を、心より念じまして、ペンを置きます。皆様くれぐれも、お体を大切に。次回もお楽しみに。



鳴神 (絶間姫の話に聞き入る場面)

出典：<https://allabout.co.jp/gm/gc/427259/>